

ハガルの荒野

大原富枝



ハガルの荒野

大原富枝



講談社

ハガルのこうや荒野

一九八六年三月二十日 第一刷発行

著者——おおはらとみえ大原富枝

© Tomie Ohara 1986, Printed in Japan.

発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三—三 郵便番号三三 電話東京三—九四—三三(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一三〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-202664-3 (0) (文1)

ハ ガ ル の 荒 野

装画
装幀

高橋義治
中島かほる

第一章

第一章

夜が更けていた。一日の勤務のすべてから解放されて、信楽志奈^{しがらましな}は髪を梳きはじめた。短かすぎも長すぎもしない、手早くまとめられる肩にかかる長さの髪を、柘植^{つげ}の櫛で梳いている。髪は、柘植の櫛で梳くものよ、憶えておおきよ。地膚の涼しさがまったくちがうのだから……母が何かの折にそう言ったのを忘れない。たしかに髪 of 毛の一本一本を梳いてゆく感じで、頭の皮膚に涼しい空気が通るのがわかる。志奈は鏡のなかの女をじっと凝視めている。これが自分だ、と。

この深夜、世界はやっと自分の姿を、呼吸をとり戻す。耳を澄ますと人間の世界の物音はすべて絶えて、どこからか、どどう、どどうと、別の世界の音が、何か物の崩れ落ちるらしい音が響いてくる。

信楽志奈はそれを聴いている。その音は心のなかの風景から響いてくるものだと言わなかった。果てしない曠野が展けてくる。砂漠であった。岩砂漠と砂の砂漠がほんの僅かに混っている。樹木らしいものの影はなくて、赭^{もみ}っぽい岩砂漠に陽が照っている。なぜか、熱は感じられない。月夜のような、昼間の暑熱から急激に冷え、気温が零下にまでさがってゆくような岩砂漠がしんと拡がっている。そして、どこからともなく、どどう、どどうと間を置いては何か物の崩壊する音がしているのだ。

いつから、このような風景が自分のなかに生れたのであろう、と信楽志奈は自問してみたがはっきりしない。後の事務机の上には『寮長日誌』がきちんと置かれていた。その中の今日の欄に記入した文字を思い返している。

（午後三時二十分ごろ、四年生、江馬瞳^{とう}子が体育館で倒れたとの知らせあり。駆けつけて寮の病室に収容。前島校医に往診を依頼する。貧血という診断。皮下、静脈、注射各一本。）

寮母の一人を先に本校の体育館に走らせ、自分は校医に電話をかけた。ともかく医師の往診を依頼しておく必要があった。看護婦が出て、もうすぐ往診先から帰るはずだ、先方はすでに出了と連絡があったから、という返事であった。

本校への長い渡り廊下を小走りにゆくと、向うの物理化学教室の角を曲ってくる担架が見えた。江馬瞳子は蒼白な顔を横向きに、眼を閉じていた。見守りながら付き添って寮に引返して

来た。同僚の寮母に、もう一度医者へ電話を頼んだ。

看護婦をつれない医者がやってきたのは三十分ほど経っていた。頭が痛むというほかには、病人の訴えはなかった。信楽志奈はとにかく検温だけは済ましておいた。大事をとって、熱はなかったものの、外見からの貧血らしいという推測では判断しなかった。いつかある学生が貧血らしいということで、頭を低く足の方を高めにして医者を持ったが、診断の結果は脳の故障で、まったく逆の処置になっていた。危く大事な結果を招くところであった。その失敗の経験以来、現代は年齢だけで病気の判断は出来ないことを肝に銘じた。小学生が高血圧であったりするのである。

ベッドの毛布の下に手を入れて江馬瞳子の氷のように冷たい足から運動用のソックスを脱がしてやり、そっと両手で冷たい足を包むように温めてやった。

貧血のたぐいですが、と呟くように言ったきり、前島は気むずかしく黙りこんで皮下注射を一本と、静脈注射を一本打った。

暫く様子を見ましょう。なにかあったら電話をください。

不愛想に言って廊下に出ると、

寮長先生、ちょっと――

改って呼んだ。職業的な權威を示している構えがあった。

頼みますね、と同僚を見ておいて信楽志奈は彼の後を追っていった。寮長室の前の廊下まで来て向き合くと、前島はじっくり眼を合せておいてから、ふっとそらし、

妊娠ですね。

そう言ってから、苦笑いするように小さく笑った。

え？ と口の中で言って志奈は医師を見つめた。小さくにしろ、なぜ彼はこんな場合に笑うのだろ、そのことにつまずいていた。前島にもそれが通じたらしく、彼は不機嫌になることで、その笑いを消していった。

そんなこと、簡単にわかるものでしょうか。

妊みこった経験のない志奈は仕方なくて、少し怒ったように、抗議するように見返していた。前島の診察は極く簡単なものであったこと、にもかかわらず、瞳子が拒むように見えたことも、同時に不安な気持を伴なって思い出していた。

簡単にわかるほどになっているのです。五ヵ月にかかっていますね。

顔が赧あからむのがわかるので、信楽志奈は言葉が出なかった。そんなはずがあるだろうか、娘たちはいまでも承知している。そんなうかつなはずはないのに、と思う。思わず途方に暮れた声になった。

本人はどうなのでしょう、それで……

いまの若い子といってもいろいろですからね。

前島は他所に眼をやりながらぼそつと言っている。なにかうそぶいているかにも見えて、信楽志奈はじつと見つめていた。

本人とも、また保護者とも、よく話し合ってみてください。いずれにしろ、いまとなつては無理ですからね。

はい、わかりました。

突然、あたまのなががいんときしむような寂けさになって、すると相手との距離が明瞭になった。

どうしても、というのなら方法はないわけでもないが、なるべく避けたいですからね。

信楽志奈は頭をさげて言った。

それでは、お送りいたしません。ご苦勞さまでございました。

病室に引き返すと、江馬瞳子はぱっちり眼を開いて見つめてきた。

せんせい、校医の先生、なんて言いましたか。

ゆっくり眼をそらしながら訊く。

言葉を選ぼうとしてつい手間どりながら、

貧血ですって、やっぱり。疲れたのね。

江馬瞳子は一度見返した眼をまたそらしながら、うつすら笑った。

わかっているんです、わたし。寮長先生……

向うむきに枕に頬をつけたまま、低い声で呟いている。開き直っている感じではなく、意外に稚いような、素直な感じである。

そう？　ほんと？　それでどうなの。

具体的な言葉を口にするときには、ある生臭さを感じて困惑している。そんな心の動きには、さっき、前島医師からいきなりその言葉を聞かされたときの、本能的な嫌悪と、彼の苦笑のようなうす笑いに漂っていた、ある卑しさのようなものへの複雑な思いが多分にあった。——いつかも、彼はあの種の笑いを浮べたことがあったはずだ。そのころの自分は、心の底のそれへの嫌悪を、表に出す勇気がなかったのだ。そんな卑屈さも愛の一部というのだろうか、と苦い気持になっている。

お母さんには、話したの？

母子家庭の娘だったことを思い出して訊いてみた。瞳子は首を振って煩わしそうに、

いいんですから。話さなくても……

どうして？　なぜ話さなくてもいいの？

瞳子は黙っている。その沈黙の濃厚さに、信楽志奈はなにか脅かされる心持になった。

結婚するの？ そのひとは。

結婚なんか、しませんから。

振り払うような性急さで応えた。言葉がナイフのように空を切る鋭さになっていた。

ごめんなさい、こんな話するつもりはなかったのよ。さあ、とにかくぐっすり眠りなさい。寒くはないわね。

毛布の肩先をちょっと抑えておいて、すべり出るように病室を出た。

学生たちはみんな見事に伸びた肢体を持っている。叩くと金属的な響がするだろうと思われるような筋肉の張りようをしている。日本の女としては小さい方ではない信楽志奈が話をするときは見上げなければならない者ばかりだった。娘たちが群れて廊下の向うから来るときは、腕や脚や、しなやかでいて勁い^{つよ}肉体が重なり合いながら青々しく匂い立って、むっと息が窒^{つま}るような生命の蒸れた気に包まれてしまう。圧迫感に、思わず足を踏みしめて堪える心地になる。廊下で若い寮母の村瀬に行き逢った。

魚勝、来ましたか。

相手が江馬瞳子を話題にしそうだと思うと、つい被せるように先に訊いていた。

はい。八百桑も。春菊いいのが入りました。

そう。病室、面倒でしょうけど運んでやって……ああ、いいわ、私が運びます。

江馬瞳子、どうなんですか？

貧血ですって。山登りしたりして、疲れたんでしょね。

昨日、江馬瞳子のクラス全員は近くの大して高くはない山へ登った。植物の宝庫といわれる山であった。

寮長室のドアを後手に閉めると、そのまま暫くもたれて立っていた。江馬瞳子一人のこととしてではなく、自分自身のこととして、そうでなくてもどこかで深い関わりのあることとして、頭のなかに渦巻いているものがあつた。このままじっと考えていたい。

しかしこれから夕食の支度の始るところであつた。自分の時間など一分もなかった。いっさいのことはそつと片寄せておいて、いまは必要なことだけしなければならぬ。

炊事場とそれにつづく食堂は、いま一日のうちで一番充実した多忙のさ中であつた。集團の食欲を満たす場というところはいつも殺氣立つものがあつた。器物の触れ合う音の、人間の身体の動きの波の、それらが重なり混合したなかで、四人の炊事婦と三人の寮母たちが黙々と緊張して働いている。

言葉は極度に短かく、必要ぎりぎりに鋭くなり、身体の動きも必要最小限に無駄のないものになつている。

盛んな湯気の立ちこめる調理場に、炊事婦たちは、大量の材料と格闘するように働いてい

た。上臍部まで袖をまくりあげている太い腕は赤々と充血して逞しく輝いていた。顔や身体は目立たなくなり、腕だけの生きものが何本も何本もその空間に躍動している。このような労働は信楽志奈の育つて来た世界であった。彼女が自分で見つけて生きてきた世界がそれであった。十歳にもならないうちに、自分で探して見つけた世界である。

食堂のなかには、炊事場とはちがった作業が待っていた。一種の流れ作業のように身につけてしまっている。何も考えず、ひたすら眼の前にある仕事と取り組んでゆく。

出来上った料理が大きなはんばうに入れられて食堂に運びこまれる。寮母たちはそれをそれぞれの小さい食器に盛り分け、当番として出ている寮生たちの大きな取手つきの運び盆の上に載せてゆく。一つの手順も狂ってはならない。汁物の場合は熱湯に近い温度なので一層気を抜くことはゆるされない。汁の身の分配の公平さ、数の過不足ない分配をも十分眼配りしている。

病室へ夕食を運びながら、やっと自分の時間になった心地でほっとした。娘たちの私生活について持っていた自信が大きく揺らぐのを感じている。江馬瞳子がいやに落着いていて、志奈には彼女の心のありどころが掴めなかった。ここに勤めて十五年になる。寮長になって七年目である。いま一番困難な事態に行きあたっているのかも知れない。あと半年で江馬瞳子は卒業を迎えるはずであったのに。

いかが？ 気分は。

まどろんでいるらしいが、低い声で話しかけてみる。強いて起こす気はなかった。病人は毛布のなかでもぞもぞとして、

ねむーい。ねかしておいてえ。

そう。じゃ、ご飯とおみおつけ、温めておいてあげるね。

ごめん、先生、食べます。お腹ぺこぺこ。

眼は眩しそうに閉じたまま言っている。

眠れてよかったわ、じゃ熱いうちに召しあがれ。

江馬瞳子はベッドの上に起きて坐った。運動服のままである。若い女の寝くずれた愛らしさと、しかし普通ではない身体という意識が信楽志奈の眼をそらさせた。

一人の方がいいでしょ。

先生もお夕食でしょ。

わたしは最後よ。皆が済んでしまってから。

じゃ、ここにいて。

味噌汁にゆっくり口をつけ、ああ、おいしい、と溜息のようという。

今日のしじみは栄養満点だって、魚勝が威張ったの。

椅子をずらして窓際に寄り、中庭を眺めながら、秋が更けたのを感じている。中庭は野草園と名前だけはおもしろくつけられて、少々は珍しい野草も植えられている。寮生が買ってきて花を見たあとの栽培種の鉢ものもまじっていて、いまは荒れている。

個性の強さで目立つのは山芍薬（しやくやく）の実で、はじけた三枚の赤紫色の萼（がく）に、黒紫色の種子が粒々として、毒々しいほどきっかりと存在している。いつの年の文化祭であったか、本校の茶室にこれが活けてあったのを、忘れがたい印象で眼に刻んでいた。山おだまきは葉がまだ残っている。母の好きな花だった。

水色絞りの手絡（てがら）をかけた丸髻で坐っている母を、斜め後から眺め、絵のようだと思ひに見惚れていた記憶がある。しきたりのきびしい日本橋の商家に嫁いだ母は、隙のない身だしなみで坐っていた。甘えたという記憶はない。年に一度、新年に母方の祖母の家で逢うことの出来る人であった。小さい門松がしるしばかりに隠居所の格子戸の前に立っていて、そのころは露地には、かーんと冴えた追ひ羽根の音がしていた。

——ぐずだね、ほんとに。よく似たもんだよ。悪いとこばかり似るんだね。

母の名は決して口にしないで、義母は叱言のたびにそんなふうな厭味を言った。そう言え

ば、叱言か、用を言いつけるとき以外は義母は志奈に口をきいてくれなかった。幼いときは理由がわからないのでひたすら恐れてばかりいた。

義母の知っている子供時代の母はどうだったか、むろん志奈には知りようがない。もの心ついたころはもう、ぐずどころか、八方に気を配って心の休まる暇もない女であった。白髪を小さい丸髷に結った、立居振舞すべて礼法にかなったお姑さんがいて、いつもどこからか母のすることを見張っているのです、いつときも気を抜くことができないのであった。

そのお姑さんがいるために、何人もの人が嫁にきては出てゆき、母は四人目であったという。志奈はもちろんそのお姑さんを見たことはなかった。祖母が話してきかせたのだ。

お母さんも、ここへ戻ってくればいいのに。

志奈がそういう。

戻れるものなら、とうの昔に戻っていたわさ。

戻れない理由、母をそんな境遇に縛っておくのが自分の存在なのだ、ということはやがてわかって来た。――

ご馳走さま、いただきました。

後から江馬瞳子があいさつした。

いえ、お粗末さま。